

明日、君がいない

2007(平成19)年5月17日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本・共同編集・プロデューサー＝ムラーリ・K・タルリ／撮影監督・共同編集・プロデューサー＝ニック・マッシューズ／音響デザイン＝レスリー・シャッツ／出演＝テレサ・パルマー／フランク・スウィート／サム・ハリス／チャールズ・ベアード／ジョエル・マッケンジー／マルニ・スパイライン／クレメンティヌ・メラ（シネカノン配給／2006年オーストラリア映画／99分）

……若者はいつの時代も悩むもの。そうは思っても、その悩みがこれほど深刻とは……？ 昨年のカンヌ国際映画祭を震撼させたのは、ムラーリ・K・タルリ監督が19歳の時に着手したこの映画！ モノローグ形式の活用、時間軸をずらした映像テクニクなどによって、7人の高校生たちの心のあり方と対人的葛藤の姿が、リアルに迫ってくるはず……。7人の男女誰もが「自殺」と隣り合わせの高校生活だが、衝撃の冒頭シーンは、ラストではどのような結末に……？

昨年のカンヌ国際映画祭で大きな話題を……

カンヌ国際映画祭は、毎年5月に南フランスのカンヌで開催されるが、60回目の節目となる今年（2007年）は5月16日に開催された。今年の日本作品の注目は河瀬直美監督の『濱（もがり）の森』だけだが、韓国のキム・ギドク監督の出品にも注目したいもの。コンペティション部門22本の出品作は、今年もさまざまな話題を提供してくれるはずだ。そんなカンヌ国際映画祭で、昨年「ある視点」部門において上映され、大きな話題を呼んだのがムラーリ・K・タルリ監督の『明日、君がいない』。

何が大きな話題を呼んだのか？ その第1は、オーストラリアで1984年に生まれたムラーリ・K・タルリ監督が、映画について何の経験もないまま19歳の時に着手し、ニック・マッシューズの協力を得て2年がかりで完成させたというこの映画の完成度の高さ。第2は、オーストラリアの高校に通う男4人女3人、合計7人の高校生の、人

には言えない真実の姿と若者同士のぶつかり合いや交流のナマの姿を描く中で、誰もが自殺と隣り合わせ状態にあるというショッキングな問題提起をしたこと。そして第3は、監督自身の14歳の時の体験を踏まえて、高校生の自殺を抽象的な問題ではなく、超現実的な問題であることを提示すべく、ある1人の高校生の自殺を現実に観客に示したこと。

ここまで論点を示せば、この映画に対する興味が湧き、またそれを観るについての自分なりの視点も定まってくるはず……。『教育再生会議』において、わかったようなわからないような抽象的な議論を飛び交わせる時間があるのなら、こんな映画を上映した方がよほど論点整理に役立つのでは……？

『エレファント』 vs. 『明日、君がない』

去る4月16日、バージニア州ブラックスバーグにあるバージニア工科大学で、韓国からの留学生による銃乱射事件が発生した。これによって、銃規制の議論が一時的に展開されたが、早くも沈静化した模様……。アメリカでは、何かの事件が起きるたびに銃規制の議論が浮かんでは消え、消えては浮ぶということのくり返し……。

1999年4月にコロラド州コロンバイン高校で実際に起こった銃の乱射事件を題材とした映画が『エレファント』(03年)で、これは2003年第56回カンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞と監督賞をW受賞するという栄誉に輝いた。しかし、私はこの作品について、「当然私は大きな期待をもってこの映画を観たのだが……？ 結論を言うと、その期待は大きく裏切られてしまった」と評価し、星3つとした。もっとも他方では、「私と正反対の評価も……」という小見出しで絶賛モノの評論も紹介し、「これほど人によって1つの映画の評価が異なるのも珍しいが、さてこの映画を観たあなたはどっち……？」と結んだ(『シネマルーム4』221~225頁参照)。

『明日、君がない』の映像テクニクは……？

しかし、『明日、君がない』については、カンヌ国際映画祭で受賞こそしていないものの、そのすばらしさを実感！ 『エレファント』に比べて何よりもいいのは、7人の高校生たちそれぞれがもつ心の悩みと葛藤を、各人のモノローグを含めた映像テクニクによって、観客が理解し、共有できること。そしてまた、高校生同士の交流やぶつかり合いについては、巧みに時間軸をずらしてストーリーを交差させるとい

う手法によって、私たちの理解を容易にしてくれていること。人によっては「そんな手法は素人のやり方で邪道だ」というかもしれないが、私はこれはこれですばらしい映画づくりのテクニックだと思っている。

『エレファント』は「ただ校内における2人の乱射の様子とそれによる惨劇の様子をカメラが追っていただけ。そこには、なぜ？ どうして？ 何のために？ という疑問は何も示されず、ましてやその答えは何も示されていない」というのが私の大きな不満だったから、『明日、君がいない』はその点が大違い。さて、こんな私の評価をあなたはどう評価……？

ミステリー色も少し……？

この映画は、冒頭から緊張感溢れるシーンでスタートする。舞台はオーストラリアのある高校。時間帯は生徒たちが帰り始めた午後2時37分。

1人の女子生徒がドアを必死に叩きながら、中にいるらしき人に「早くドアを開けて！」と叫んでいるが、何の反応もなし。そこに応援に駆けつけてきた教師が「用務員を呼ぶように」と指示する一方で、同じようにドアを叩き続けたが、やはり反応なし。すると、ドアの下には部屋の中から流れ出てきた血がゆっくりと広がっていった。やっと駆けつけてきた用務員がドアを開けると、そこには……？

冒頭にこんなシーンが提示された後、スクリーン上では、卒業まであと3カ月という最後の高校生活を営んでいる7人の高校生たちの生態が赤裸々に描かれ、そしてラストには再びあの冒頭シーンが戻ってくる。さて、部屋の中で血を流しながら自殺していたのは一体誰……？ この映画には、そんなミステリー色も少し……？

高校生の悩みアラカルト……

高校生の悩みの代表格は、成績と男女関係（セックス）と決まっている（？）が、それ以外にも病気やいじめ・ケンカや進路そして稀にはゲイ・妊娠等々……？ 彼らが生きている場所は家庭と学校の2つ。そのどちらかで悩みがあればそれだけでもしんどいのに、両者共となれば、その深刻さは格別……。

5月15日には、実の母親を殺した会津若松市の高校生の事件が報道され、日本国中に大きな衝撃が走ったが、悩みが深刻化する中、自らの命を断つ事例は次々と増加している。なぜ、もっと早く悩みを打ち明けることができなかったのか？ なぜ、助け

てくれというサインを読み取れなかったのか？ 自殺事件が起こると、必ずそんなありきたりの質問が投げかけられるが、結局はうやむやの内にその悲しみは拡散していくだけ……？

ところが、友人の自殺に憤り、絶対に許せないと思ったムラーリ・K・タルリ監督は、その半年後自らの人生に絶望し、睡眠薬自殺を図ったという自らの自殺（未遂）体験を踏まえ、7人の高校生たちの内面に立ち入り、その悩みを赤裸々に描いていく。すると、あるある、いっぱい悩みが……。そしてその内容はいずれも深刻なものばかり。そう、この映画は7人の高校生の悩みアラカルト……？

兄の悩みは？ 妹の悩みは？

その悩みの内容と深刻さはスクリーン上に1つ1つ丁寧に描かれていくので、それを観てもらおうものとし、ここでは各自の悩みのポイントだけを、人物紹介を兼ねて書いておきたい。

マーカス（フランク・スウィート）とメロディ（テレサ・パルマー）は兄妹。マーカスは、厳格だが一流弁護士として富と名声を手に行っている父親を尊敬し、自分でもそれを目指して懸命に学業に励んでいる。したがって、かなりガリ勉タイプの男の子だが、なぜかピアノの才能も……。

それに対して妹のメロディは、優秀な（？）兄の陰に隠れる存在で、女の子だということもあり父親の期待が兄のマーカス一身に集まっていることのとぼちりを受け（？）、自分は父親から疎まれていると感じているナイーブな女の子。こんな兄妹は今2人だけで生活しており、今日は兄の運転するベンツで学校に通ってきたが、それは一体なぜ……？ こんなマーカスとメロディの悩みの独白は、きっと多くの高校生たちに共通するはず……。

ちなみに、父親が弁護士でその子供が兄と妹という家族構成は、わが家と同じ。すると、わが家の兄妹の悩みは一体何だったのだろうか……？

肉体上の強者と弱者は……？

どの学校やどのクラスにも運動の得意な奴がいるし、逆に1人や2人は身体に障害をもった奴がいるもの。運動が得意で、「学校は弱肉強食のジャングルだ」と考えている大柄の男の子がルーク（サム・ハリス）。逆に、片足が少し短いため足を引きず

って歩いているうえ、尿道に障害をもつため、つい漏らしてしまうというやっかい者がスティーヴン（チャールズ・ベアード）。

こんなスティーヴンがいつもいじめの対象とされていたのはある意味当然だが、これ以上家族に迷惑をかけたくないという思いのために、スティーヴンは誰にもその悩みを打ち明けることができなかった。したがって、あと3カ月の高校生活は、彼にとってはすごく長いもの……。

お姫サマもいれば、ゲイも……

頭はあまり良くないがスポーツマンでカッコいいルークにゾッコン惚れ込み、今は彼の唯一人のガールフレンドであることに誇りをもつとともに、「将来は彼と結婚するの」とその夢を独白するお姫サマがサラ（マルニ・スパイレイン）。そうすんなりコトが進めばいいが、ルークはホントにサラだけを愛しているの……？

他方、近時よく性同一性障害問題が話題になっているが、「俺はゲイだ」と公表し、クラスメイトからの非難や攻撃をまともに受け止めているのがショーン（ジョエル・マッケンジー）。クラス討論でも堂々とした受け答えをし、榮譽ある孤立を楽しんでいる雰囲気だったが……。

もう1人はケリー……

以上、6人の高校生たちが再三独白シーンに登場し、自分の悩みをストレートに表現している主人公たち。ところで、この映画にはもう1人、音楽教室でピアノを弾いているマーカスに対してマーカスが書いた作文のことを尋ねたり、鼻血を出しているスティーヴンに対してティッシュを渡してやる女の子ケリー（クレメンティーヌ・メラ）が登場する。

しかしムラーリ・K・タルリ監督は、なぜかこのケリーにだけは独白シーンを用意していない。それは、ケリーがその他の6人と違い、さしたる悩みをもっていないせい……？ そんなことはきっとないと思うのだが、そこらあたりの位置づけと差別化に、ムラーリ・K・タルリ監督の何らかの狙いが……？

論点その1 いじめとそのレベルは……？

以上で7人の高校生たちのキャラクターと悩みの紹介を終え、次に大いにお節介な

がら、この映画が描く悩みのオンパレードの中での、私なりの論点を提示しておきたい。

その第1は、どこの学校にでもあるいじめとそのレベルの問題。この映画に登場するいじめは、当然身障者のスティーズンに対するものだが、その主たる加害者は、意外にも(?)肉体的強者であるルークとその悪友の2人。まあ、このいじめのスタイルは、どこにでも転がっているもの……?

もう1つのいじめは、ゲイであることを公表しているショーンに対するものだが、そのシーンはクラス討論会で理論武装をしながら登場するから、是非それに注目を……。

これだけ書けば、いじめ問題における力関係は明らかで、ルークが言うように弱肉強食のジャングルの中、誰が勝者で誰が敗者であるかは明白。しかし、ムラーリ・K・タルリ監督は、そこにアツと驚く展開を用意しているので、是非それをお楽しみに……。

論点その2 妊娠騒動の勃発は……?

高校生ともなると、1学年に1人や2人は妊娠騒動が勃発するもの。日本の女子校では、人工妊娠中絶のための同級生たちによる善意のカンパ活動(?)の話を、私は弁護士として何回か聞いたことがあるほど……。

独白シーンではクローズアップによく映える美しい素顔を見せるメロディは、なぜか今トイレの中で妊娠検査薬を試していたが、その結果は何と陽性……。こりゃヤバイ! そんなメロディが手に検査紙を持ったまま、茫然自失の状態でトイレの中から出てきたのは、さらにマズかった。なぜなら、偶然その場でうがいをしていたサラに、その姿を発見されることになったから……。

こんな場合、なぜか「内緒だよ、内緒だよ」と言いながらそんなうわさ話は広がっていくもの。サラの口から1人の友人に伝えられた情報は、たちまち回り回ってメロディの兄マーカスの耳にも……。さて、このメロディの妊娠騒動は一体どんな波紋を呼び、どんな結末を……?

論点その3 女の嫉妬心は……?

世の中、相思相愛の男女関係ばかりなら問題はないが、世の中には必ず三角関係や

ダブル不倫の関係が生まれるもの……。ルークの公認の恋人であり、学校内で堂々と熱いキスを交わしているサラだったが、なぜか最近ルークのキスはおざなり気味……。そんなことを気にしつつ、彼の結婚相手は私しかいないと信じているサラだったが、メロディの妊娠騒動を聞くと、そのお相手がルークなのでは、という思いを否定することができなくなり、その不安は募るばかり。

そんな場合の女の嫉妬心の表れ方は……？

あとはあなた自身の目で……

これ以上書くと「お前はバカか！」と怒られそうなので、論点整理はここでやめ、あとはあなた自身の目で確認していただこう。しかし、ここまで詳しく7人の高校生たちの心の悩みと、学校生活上に表れてくる現実的問題点を指摘したわけだから、この後何らかのとんでもない事件が発生するであろうことは明らか……。それが『エレファント』では銃の乱射という事件だったが、この映画のそれは自殺……？

7人のうち誰が自殺してもおかしくないほど、みんなギリギリの状態まで追い詰められていることは明らか。そこで、私のこの評論を読んだうえでこの映画を観る人は、事前にそれは〇〇と名前を紙に書いて、私宛てに連絡してもらいたいもの。なぜなら、もしそれが7分の1の確率で当たった場合、私はその人にごほうびを与えてもいいと考えているから……？

2007(平成19)年5月18日記